

# 『ポエム散策』

取材日/H29 7 12

所在地/山陽小野田市  
新沖1-7516-23

## 新沖緑地公園編

橋高栄一

### 俳句という詩の力① 市の歴史と繋ぐ

前日の雨と打って変わった抜けるような青空。庭園を一周する。遊歩道は時折、木洩れ陽の緑のトンネルを抜ける。みずみずしい緑が実に美しい。

【二つの歌碑と建立の趣旨】庭園の方向に歩みを進める時、遊歩道に向かって、(左)森田峠の句碑 (正面)西村草生の句碑 (右)由来記の石板が目にとまる。



石板の記事を以下に採録  
しご案内と致します。



<句の解釈・所感>

(1) 森田峠の句「石炭の露頭芒を生ひしめず」—子供の頃は七夕や中秋の名月など親しむことの多い植物だった芒。一説に【スス(スクスクと真っすぐに育つ+キ(茎)

石炭の露頭  
芒を生ひしめず  
峠

森田峠は大正十三年大阪に生まれる  
高浜虚子・阿波野青畝に師事、俳誌  
かつらぎ」主宰、俳人協会副会長  
宝塚に住む。この句は昭和五十四年  
江戸公園における属目吟。当地の  
石炭産出の名残をとどめる句  
建立年月日 平成元年九月  
建立者 小野田かつらぎ句会

という。古来、高い繁殖力と生命力で、長寿を表す秋の七草でもある。炭鉱が閉じて久しい。戦中は国家の生命線、戦後は膨大なエネルギー消費社会の幕開けを支えた。この句が詠まれた時、すでにこの地の石炭産業は終焉を迎え「兵どもの夢の跡」と化していた。「石炭層の痕跡」が失われるのを護るかの如く、露頭は芒の侵出に対峙している。

強いインパクトを受け、回顧に傾斜することなく、彼の心はこの一点に焦点を結んだ。客観を貫いた確固たる描写となった。「芒を生いしめず」—まるで〈掟を布告〉するような、朗々たる威厳ではないか。そこに彼の密やかな畏怖の念と一つの時代への挽歌を感じ取るのである。



豊の田の  
下に坑道  
ありと言う  
西村草生  
西村草生は昭和三年  
小野田に生まれる。  
阿波野青畝・森田峠に師  
事。俳人協会山口県副支  
部長・全国かつらぎ同人  
会理事・中四国かつらぎ  
同人会会長歴任  
句は昭和六十年高千帆区  
における吟行句。

〈句の解釈・所感〉(2) (豊かに稔った田んぼの下に 炭鉱の坑道が 今もあるってさ。)  
「へえー、見たいよ、僕。私も！」—子供たちなら、こんな楽しい反応が返って来そうだ。

「昭和60年吟行」とある。広々と田圃がひろがる江汐公園方向にかけて炭鉱の有無を調べる。公園の案内板に「石炭採掘による地下鉱物の流入により、水は青く澄み、神秘的な湖水に変わり魚類は姿を消した。炭鉱閉山(昭和38年)後は水質も変わり、現在では鯉や鮒などが生息するようになった。」とあるが、本山地区と今の若山ゴルフクラブ以外は地図上に炭鉱跡はない。この「昭和38年」は、小野田の本山炭鉱が22年間の稼働を止め閉鎖した年でもある。高千帆地区は住宅街となり、田圃風景は高速道の北が美しい。やはり江汐近くで詠んだ可能性が高い。1987年、縁あって私は当地に赴任した。ある日、大学に近い《焼野海岸》で岩場に貼りついた海藻を採取する70近い女性が、「昔この辺は地べたに石炭が転がっちゃってね。毎日拾うて帰ってご飯を炊いちよった。」と話しに来てきた。徒歩数分の岬寄りの公園に《旧斜坑坑口》がある。沖合まで3kmの坑道が続いていたと云う。総延長19km、最深部で約200mの《海底炭田》があったのだ。

立ち話から30年の歳月が流れて、この句に出会うことになった。《豊の田の下に坑道ありという》—地上では豊かに広がる稔の秋、その下に炭鉱の坑道が眠っているという。奥行と広がり響き/O/、[TO/YO/NO/TA/NO]「黄金の波の」と続くかに見える流麗な《枕詞効果》、再び/KŌ/DŌ—豊かで古代的な土のイメージが、[炭鉱の繁栄と悲劇性]の全てを包んで時を超えて行く。市の歴史に想いを馳せる人々をさらに後代へと繋いで行くに違いない。(きつたか えいいち/日本英語表現学会評議員)



空、季節は《秋》。「稲妻の一閃、激しく闇に照らし出された情景」があるでしょう。「何が」照らしたされるにせよ鮮烈な印象だ。名画が《永遠の一瞬》を切り取る如く、一描く。これがある種の普遍性(誰しもの真実)を宿すことになる。俳句が大切にしてきた《季節》は単なる《時間》ではない。自然の摂理と人生の営みの舞台(場所)として《時空の広がり》を持っている。豊かな季節感と美しい詩情は、極めて限られた言葉による俳句という《詩の形式》の賜物なのだ。

さて、俳句に対して門外漢の私は、作品に相對する時、自分の心に生じた変化を觀察するしかない。理解の《鍵》は、これまでの自分の人生すべての中にあるという気がする。もし背景知識を共有していれば大きな助けになる。

(2) 皆吉爽雨の句を考える。① 『くむ』[汲む、酌む]を《大辞泉》は第一義[日常的用法]—器や手で、あるいはポンプなどで水のような液体をくみ出す、と解説する。実はこれが井戸に釣瓶やポンプのあった私たちの子供時代の体験と一番合致している。

第二義[古くから]—茶や酒を器に注ぎ入れる、あるいは、注ぎ入れて飲む、とある。

昔、次女が4歳の頃、食卓で茶わんを差し出して「ごはんくんで！」と云ったことがある。

我が家のご飯がいつも「液状」であったわけではない。彼女の「くむ」は《言葉の元素》のレベルだったのか、後に対象の種類や性質に応じて日常の言葉に枝分かれした。「古くから」と記載のある「くむ」は《ことだま》と呼ばれている原初の力を秘めているほど古いのだろうか。

② 「つひのしづく」とは[滴り落ちる最後の最後の一滴、(液体の)ひと粒]。最近の辞書は「しづく、また、しづく」の順だが、私は「しづく」に和みと豊かさのメージを感じる。

新茶を器になみなみと注ぐ。手元を見つめる。香り立つ自然の恵みの凝集  
—その最後の一滴に、上質の新茶への自信ともてなしの心がこもっている。

句が秘めた力であろう、一気に新茶の香り立つ季節へと引き込まれる、目の前に情景が現出し、その席に自分が存在する感があるのだ。ある日、師が茶をふるまう。あるいはその逆かもしれない。「力あり」という表現に、私は下線の三つの力が渾然一体となった様を感じる。

## 2. 伊藤颯空のプロフィールと句碑 鶉(ひたき)より 今朝は笹子の早く来し 颯空

伊藤颯空は元小野田助役。俳誌『雪解』の同人で郷土史家でもあった。皆吉爽雨を師とし 昭和28年5月に小野田に招聘している。「小野田俳句会」の創設者伊藤の清廉な人柄を偲び竹馬の友であった吉屋北斗が昭和46年に建立した。案内板は平成3年9月に「小野田雪解句会」が設

置した。師弟の碑が相並んで11年目のことであった。

《句の解釈と所感》(1) 季節は仲冬、鶯の子が巢立つ季節である。いつもは鶯(ひたき)という小鳥が早く来るのだが、今朝はなんと鶯の子が先に来て鳴いている。冬月半ばの誠に微笑ましい小鳥たちの姿だが、「早く来し」に私は微かなく決断の気配も感じる。幼い鳥の、あるいは作者のかも知れない。それには理由がある。

池を囲むこの小高い住宅地は以前「湖畔の町」という別名があった。地図では「単なる池」だが、友人から「湖の畔、素敵な処に住んでるね」とハガキが届く。今70歳前後のこの地の友人は、当時「子供の頃は手ごろな山と谷だったのでよく遊んだなあ。」と谷を見つめる顔になる。つまりは鶯の領分でもあったのだ。

その時期、裏の木立で「ホーホケキョ」、「ケキョケキョケキョ」という鶯の声をよく聞いた。少し離れて「ホーホキョケ」も聞こえて来る。《鶯の谷渡り》と呼ばれる本鳴きの境地にいる成鳥は、「?」、と明らかに絶句し絶妙な間合いで沈黙する。

ある日、若い鶯は先輩たちに《正調》を聞かされてはやり直している。その鳴き声がひとしきり響き合い、やがて「ホーホケキョ」「ホーホケキョ」と長閑な間合いで呼び交わす頃には、家内と私が「ホーホキョケツ」と幼い鳴き声を真似ると、「?」、「?」—どちらも絶句するのだった。

(2) 例の「笹子」は、あの朝、本格的に歌の練習を始めようと、鶯より早くやって来たのではないだろうか。生命の歴史を刻み続けたこの種族の体内時計が、「春」を感知して、《春モード》にシフトした、そういう説明もあり得ると思う。唯、《動物機械論》に墮してしまうのは、あまり好まない。大切なものを護るために小さな命を懸けて闘うか飛び去るか、一瞬の決断は日常にもある。

あの子は、春の美しい歌へスタートを切った。だから早く来ることにしたのだ、きっと。

天地にみなぎる生気が万物を生育すると昔の人は信じ、これを「(元)気」と名付けた。この微笑ましい情景に、私は小さな命のもつ《清冽(せいれつ)の気》を感じるのだ。「決断の気配」の二つ目は、この叙景を「早く来し」によって簡潔に「描き切った」点だ。

—ある朝の<真実>が読み手の心にくっきりと造形されて、誰(し)もの朝となる。

朝の光、空気の冷たさ、チャッチャッチャツという鳴き声と時々跳ねる梢、  
他の小鳥の鳴き声が聞こえ始める。朝の空間が広々と開けている ——

(きつたか えいいち/日本英語表現学会評議員)